

現代人の心にも響くものがある

「民話っていうのは、たとえば、いろいろのそばで、じいさんやばあさんが子どもたちに語り聞かせたものがたり。そんな昔話は、今日のわれわれにとっても、意識の深いところに響くものがあるんやな。」

民話といわれるもののなかには、昔話、伝説、世間話なんかがあってな、昔話っていうのは、むかしむかしあるところに……で始まるようなお話で、時や場所が特定されていないし、出てくる人物も限られていない。伝説は、時代や人物が設定されている話や。場所の設定は不可欠ではないけども、ここがその場所やというふうに語られると、話に深みが増すわな」

想像力をひろげる口承

「二十年ほど前になるかな、県が民話の採集に力を入れた時代があって、僕も、山東、伊吹などで編集に関わってきたんやけれど、各地で『ごそこの民話』というような本がま

とめられた。

もともと、語り言葉で聞いたものを文章にするのはむずかしいもんやし、文字になったものを読んでも、読み手のもってる容量の範囲でしか、話は広がらんからね。紙芝居という方法もあるけれど、これも絵が想像を規制してしまう心配があるし……。」

それに比べ、語り手の口から出される言葉には、声の大きい小さい、高い低いなどの抑揚があるから、想像が広がるな。

テレビからも声は聞こえるけど、これは一方通行で、語り手と聞き手のかかわり合いというもんがない。語る人と聞く人が、お互いの表情を間近で見て、互いの交歓から雰囲気が生まれてくる。それが語り、口承のよさやな」

民話の根底には自然信仰が

「民話には、原始的な自然信仰が基本にあつて、山にも川にも雲にも風にも、心やたましいが宿っているんや。そこに、人の願いや喜怒哀楽が重ね合わされて、お話ができる。」

心と口とばを



語り継ぐ

福永田澄さんに聞く

本誌「伊吹百草」執筆者
伊吹町寺林在住

おじいさんと幼い孫がいる光景を思い浮かべると、そこには、素朴な口ばのやりとりが見える。たわいない口ばのなかで、口ばを通して伝えられるものがある。伝えなくてはという、使命感があるわけではない。興味津々のそき込む子どもの瞳に急がされて、つむがれることばの綾。いつだっておじいちゃんに聞いた話。お屋敷しながらおばあちゃんが聞かせてくれた話。……そういえば、もつと聞かせて、せがんだお話をわたしにもあったと気付く。そなたなつに、心のなかに生きつづけるものがたりを「民話」と呼ぶのだろうか。

話がある。村人の幸せのためならと犠牲になつて、庄屋の娘がサル王様のもとに嫁ぐことになった。娘は、大きな水瓶を一つ持っていきたくてと言つたんや。迎えにきたサルに瓶を背負わせて、山奥へ向かった。途中、川にかかった一本橋をサルが渡りはじめたとき、娘は橋をゆらして、サルを川の中に落としてしまった。背負つたカメに水がズブズブ入つてきて、とうとうサルの王様は溺れてしまった、ていうんやな。

伊吹弥三郎の話はいろいろあるけれど、そのなかにこんな話がある。伊吹山に住む弥三郎という大男は、力もちで暴れん坊やつた。庄屋は娘を嫁に出し、弥三郎の一番弱いところをさぐらせた。村の人たちは、姉川の川普請に弥三郎をかりだして、弥三郎が掛矢を振

り上げたとき、彼の弱点である脇の下を突いて殺した、ていうんやな。

この二つの話は、どれもおかしな(矛盾した)話や。サルの王様も弥三郎も、ここでは神さまの象徴として登場してるわけで、その神さまを、人間の浅知恵でだますというようなことは、原話には決してなかったはずや。妻が夫を裏切るの、人間性を否定することや、川は神聖なものやから、そこで血を流すことも絶対ないはずなんやな。

再話には、おもしろおかしく話を変えてしまふことはあつても、変えてはいかんことがある。自然と共生している時代に、神さまを人間がだますなんて話がつくられるわけ、ないわな。民話の世界から自然を敬う気持ち学ぶつていうのは、そこどころや」

それは、貧しいくらしの中でひたむきに生きる人の姿、貧しいけれど心豊かな生き方、そういうもんがテーマになつてることが多い。

たとえば、今、アウトドアがブームやいうて、遠いところまで遊びに出かけて行くわな。自分の家に庭があつても、近くに山や川があつても放つておいて。

僕も以前、伊吹山にカタツムリが百二十種もいるというんで、探しまわつたことがあつたんや。ところが、今年も家の庭から、その珍しいカタツムリがいくつも見つかった。「青い鳥」ではないけれど、幸せはこんな身近なところにあつたんやと感じたな。家の庭だけでもたしかめたら、知らんものがいっぱい見つかると思うよ。

民話には、自然を舞台にしたものがたくさんある。そういうお話が聞いていると、いつのまにか自然の見方や考え方が変わつてくるもんや」

自然感是不変のもの

「お話を語り伝えたり、文章にしたり、つまり再話に取り組むとき、気をつけなあかんことがある。それは、当時の人たちが、自然をどういう目で眺めていたかをちゃんと知るということ。それを勝手に理解したつもりでいると、話が矛盾してくるんやな。」

美濃の春日村は、伊吹山の国見峠の向こうにある村やけど、そこに「サルゴケ」という

伝えたいことは暮らしのなかに

「僕が子どもたちに伝えたいのは、物や、物のいのちを大切に生きる生き方やな。」

今は、蚊が一匹飛んどもつても、殺虫剤を持つてきて殺してしまうわな。ちよと前まで、蚊遣り」ということばが生きてた。ネズミサシ」という木やヨモギを火鉢のなかに入れてくと、燻つて煙が出る。それを嫌がつて虫が逃げるんや。虫でもむやみに殺さんと、おととい来いよ」と言つて外へ追い出したもんや。そういう話を子どもたちに教えてやりたいと思ふんやな。

学校でも、もつと語り伝える機会をもつてほしい。子どもたちに話を集めさせることもいい。たとえば、お年寄りから、戦時中どんなものを食べたとか、どんな毎日を過してたとかいう話……。若い先生も、自分の体験談を聞かせてやつてほしい。

毎年のことだが、今年は夏の子ども会で毎日ひとつずつ花の名前を覚えさせたんや。案内知らんからね。葉っぱを一枚渡して、何か字を書いてもらい、浮か出てくるから。昔は、火であぶつて占いに使つたんだよ、などと話しながら……。」

これがその葉っぱや。葉書の始まりになつた。多羅葉で、お寺にようある木や。さあ、今日のおみやげに一枚もつておかせり」

(構成/蘭)

……恐怖はどこにある？ あんたの心に闇はないかえ……？

恐怖。……大辞典には「特定の対象に面してひるんでいる感情」とある。それに対し、不安は「対象のない無に脅かされてひるんでいる感情」である。

対象があるにしろ、ないにしろ、人は常に何かに怯えて生きていく。科学を發達させて、次々と神の領域に足を踏み入れ、全知全能を手にしたように思われる人間が、一体何に怯えるのか。「安全な怖さ」を体験したいという顧客の好奇心に応じてつくられた「ホラー（恐怖）映画では、手軽に恐怖体験ができる。しかし、生きていく限り「安全な恐怖」はない。暗がりにおのき、自己の心の闇に震撼する私たち。恐怖はどうやら「闇」にありそうだ。

これから紹介するお話は、どちらも「闇」がテーマ。じっくり恐怖を味わっていただきたい。さあ、一つめのお話は……

「米川の米洗い婆」

（長浜市米川にまつわる）

むかし、米川付近は家並みもなぐ、常夜灯がひとつもない薄気味悪い淋しい所だな、そこに気性の強いお熊婆さんが住んどったそうなの。

細い小雨がしとしと降るある深夜、米川のふちの道を提灯片手にお熊婆さんが通りかかった。すると川端で、まっ白な着物を着た白髪のざんばら髪の色もすがすがしく洗ったお熊婆さんは「出たな」と思ったが、そ知らぬ顔で洗っているものをソーツと見た。ほしたら、人間の血のついた生首や。「ひやつ」としたけど、そこは気丈なお熊婆さん、何気ない素振りをして、「ようお洗いと声をかけて通りすぎた。

ところが、後ろから「えいしよ、

えいしよ」と化け物の姿が追いかけて来よる。足早や

に歩き出すと、段々と声が迫ってくる。今にも頭上にのしかかってくるようで、ほんまに怖で怖で、身の毛もよだつほどや。こわこわ後ろを振り返ってみると、まだ血がばたばたとしたり落ちる生首が入ったざるを小脇にかかえ、化けもんがすぐ後ろにせまっとる。

お熊婆さんは、勇気を出して「うるさい！」と怒鳴った。すると化け物は遠ざかっていくようや。けど、また歩き出すと、同じように「うへへえ」と言っただけで、頭におおいかぶさるようになって来よる。こんどは「うるさい!!」と大声で怒鳴ってみた。また、婆は遠ざかっていきよる。

こんなことを何回か繰り返したら、つと目の前を若い女の人を通るのが見えた。やれ嬉しやと思ひ、お熊婆さんはその女に追ひ

人間の心の闇の中かも知れんな。さて、二つめのお話は……

「阿曾津はねる」

（木之本、高月町に伝わる）

むかし、山本山の北側の湖岸、有漏宮のあるあたりに、阿曾津という村があったそうなの。当時としてはとても大きな村で、千軒ほど家が合ったんで阿曾津千軒と言われとったんやと。

その村に、おかねという大金持ちのお婆さんが住んどって、村の人



たちは、お金に困るとおかねばあさんのところに借りに来た。ところが、欲深なおかねばあさんは高い利息を取ったんで、借りた人たちは、なかなか返すことができんと、貧乏になる一方やった。

ある晩、お金を借りていた人たちは邪見な欲をおこして、おかね

婆さんを殺せば借金を返さんですむと考えた。

「あのおねばあさんを糞巻きにして琵琶湖に放り込んでまお」

誰一人、反対するもんはおらんかった。

次の日、いつものようにお金の取り立てに来たおかねばあさんの

前に、数人の村人が立ちはだかった。「おかしい」と思ったおねばあさんは、きびすを返して帰らかけたが、村人たちは後からついてくる。怖くなったおかねばあさんは走って逃げたんやけど、年寄りやさかいですぐ捕まって、とうとう糞巻きにされて琵琶湖に放り込まれた。「やれやれ、うまきうった」と村人たちが思うとつたら、今まで静かやった湖が、にわか荒れくるい、大津波が阿曾津村に押し寄せた。一晩のうちに村は湖の底に沈んでしもたんや。

命からがら逃げ出した村人たちは、「おかねばあさんの恨みじや、恨みじや」と口々に言いながら、あちこちへ散っていったそうなの。逃げ散った人たちが住んだ村、それが今もある柳野・西野・熊野・磯野・高野の、「野」がつく村やそうや。

どうやら人間は、神でも仏でもなく、心が次第で鬼にでも変わる生き物らしい。「正直者が馬鹿をみる」。そんな諺がまかり通る世の中ではないと、信じたい。

(ミッチー)

3300円・4200円
すきやき 3300円・4200円
海鮮なべ 3500円
ガトーケース 3500円
和風会席 3500円

会社の歡送迎会・婦人会・ご家族など
和室をご利用ください。
・大広間50～60人可・小和室4室
・送迎バス有

レストラン **びわ**
びわ町阿曾根道沿
TEL. (0749) 72-3655(代)